

小野瓦窯

- 延喜式に記載された瓦屋 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



今回発見した瓦窯跡(西から)

手前の石で塞がれている付近に焚き口があり、その奥が燃焼室、隔壁を挟んで底部に畝が並んでいるところが焼成室。

平安時代、宮殿や寺院の屋根に葺いた瓦を生産していた工房を「瓦屋」と称していました。この時代の法典『延喜式』には二つの瓦屋が登場しています。栗栖野と小野瓦屋です。この二つは木工寮もくのりょうに属する官営の瓦生産工房でした。

このうち、栗栖野瓦屋は京都の北に位置する岩倉盆地の南西、岩倉幡枝町にある栗栖野瓦窯跡が比定されています。ここでは瓦の文様に栗栖野を示す「栗」や平瓦に

生産を管理していた役所を示す「木工」の文字を刻印しているものが出土しています。

一方、小野瓦屋は、同じ岩倉盆地の東部、上高野小野町にある「おかいらの森」と呼ばれる小丘



「おかいらの森」全景(西から)

現在は崇道神社の御旅所となっている。後ろは比叡山。



「おかいらの森」と窯跡
南北約40m、東西15m、高さ約3m
の丘の南側に窯跡がある。

付近にその所在が推定されていました。ここでも「小乃」や「木工」と刻印された瓦が採集されていたからです。しかし、これまで瓦窯本体は発見されていませんでした。

2004年2月、文化庁の国庫補助を得てこの丘に初めて発掘調査のメスを入れることになりました。

調査の結果、丘の南側で半地下式の平窯1基を発見しました。この窯は丘の斜面を掘り込んで作られており、西向きに焚き口がひら

き、薪を燃やす燃焼室・隔壁・瓦を焼く焼成室があります。窯の全長は3.8m、隔壁付近の最大幅は2.4m、平窯としてはやや大振りの窯です。焼成室の床には分焰牀ぶんえんしょうと呼ばれる6条の畝あぜがあり、瓦をむらなく焼成する構造になっています。出土した瓦や土器の型式から、この窯は11世紀前半に瓦を生産し、中頃には操業を止めたようです。

窯の内部や周辺からは多くの軒瓦が出土していますが、これと同じ範型で作られた同範の瓦は、平安宮や左京二条二坊にあった高陽院跡から見つかっています。

高陽院は平安時代中期に権力をふるった藤原頼道の邸宅で、『栄華物語』にも登場し、華麗を極めていたと伝えられています。ここで同範の瓦が出土したことは、今回発見した窯から瓦の供給を受けていたことを示すものです。

先に述べた通り小野瓦窯は官窯ですから、当時の藤原氏がいかに国の権力を掌握していたかを示す

資料ともなります。

今回の調査では、もう一つの発見がありました。それは「おかいらの森」全体が人工的に積み上げて造られたものであるとわかったことです。

丘を形成する土には大量の瓦片や焼土、炭などが含まれていました。これらは、瓦を焼成した時に出る不良品や燃料の灰などで、いわば当時の産業廃棄物です。その量はざっと770m³あり、大型ダンブカー110台分にもなります。

なぜ、廃棄物を盛り上げる必要があったのかは謎です。しかし、これだけ膨大な量の廃棄物があるということは「おかいらの森」の周辺や、あるいは丘の下に未発見の瓦窯が多数存在する可能性を示しているといえるでしょう。

古代の文献に登場する瓦屋の一つである「小野瓦屋」の調査・研究は、まだその緒に付いたばかりです。しかし、今回、瓦窯を発見したことで大きく進展することになるでしょう。 (吉崎 伸)



高陽院(上)と小野瓦窯(下)出土の瓦文様の向きは異なるが、同じ範を用いたことがわかる。



「おかいらの森」の断面

おびただしい量の瓦片が土層断面に認められ、ところによっては土よりも瓦の方が多い。